

I 南西諸島の天文民俗調査

1. 沖縄本島糸満・山巔毛のアガリミチブシ祭祀に関する調査記録

(1) 調査の目的

糸満市山巔毛では、コロナ禍のため、2020年～2022年は儀式のみで、ハーレーは実施されなかった。2023年6月21日(旧暦5月4日)、4年ぶりに完全な形で実施された。アガリミチブシへの祈りからどのように祭祀が進んでいくのかを記録する。

(2) 準備

午前8時を過ぎると、門中の人がビンシーを持って祈りに来る。

港ができるまで、戦前は、馬に乗ってノロが夜中の3時頃にやってきた。そして、星空の下で祈りが捧げられた。(写真右)



(3) 卯の端の香炉

午前9時、神役の玉城さんが到着した。9時11分、最初の香炉を拝む準備をする。卯の端の香炉をアガリミチブシの香炉として祈る準備を行なった。(写真右の奥のほうが神役)



現在は、卯の端の香炉、アガリミチブシの香炉、子の端の香炉、午の端の香炉…と移動して拝んでいくが、かつては(昭和40年代、ノロが健在なとき)は中央に座ったまま香炉の向きへと体を動かすという方式であった。

(4) 神役の玉城さんと門中の人による祈り。

卯の端の香炉の前で、アガリミチブシの香炉とみなして祈りをささげる。神役の横には門中の人。(門中(むんちゅう)とは、父方の血族で繋がる一族) 神役の祈りの言葉を聞き取ることができない。神役に確認すると、「神様にしかわからない言葉で祈っています」という答えが返ってきた。続いて、子の端の香炉(写真下左)を拝む。3番目に拝むのがアガリミチブシの香炉(卯の端の香炉と認識)である。午前9時25分(写真下中、下右)で、はじまってから14分が経過していた。



かつては、南山の大里ノロ、糸満ノロが参列していた。いまは、神役と、門中、「西村」「中村」「新島」の代表者が参列する。

(5) 旗を振る

午前9時59分、旗を振り、午前10時ハーレーがスタートする。

(写真右) 御願ハーレーが終わると、一位から白銀堂へ向かう。ウェーク(權(かい))を持ち、円陣を作り、ハーレー歌を歌う。(写真下左)

午後4時、すべてが終わるとヌドウンチ(集落の祭祀を司るノロの屋敷)へ向かう。(写真下中)

写真下右は、中村がヌドウンチにて円陣を作り歌う様子。



(6) アガリミチブシへの祈り

アガリミチブシへの祈りは、かつては旧暦5月1日に行なわれた。現在はノロが不在になり行なわれていない。旧暦5月1日の朔日拝み(チータチウガミ)において次のようにアガリミチブシという名前が用いられていた。

「アガリミチブシ ニヌファ ウマヌファ ヌ グエーサチ ダヤビル」(東り三星 子の端 午の端 のお声がけで あります)

「ミティン サンティン ルーグシン トウヌ グエーサチ ダヤビル」(御天 山巔 竜宮神 との ごあいさつ であります)

「アガリミチブシ ニヌファ ンマヌファ ヌ グエーサチ ダヤビル」(東三つ星 子の端 午の端 のごあいさつ であります)(金城善氏による祈りの記録)(大里字誌編集委員会 2009)

2. 宮古島の星名等天文民俗に関する調査記録

(1) 宮古島狩俣のニヌファブスへの祈り

2023年4月、根間義雄さん(狩俣出身、昭和18年生まれ)を訪ねた。

根間さんは、「ニヌファブスというのが神さまの宿る星という意味で信仰の対象に」と伝えていた。

ニヌファブス(子の方の星、北極星)への祈りの言葉について尋ねると、次のふたつを教えてくださいました。

「じょーとー(上等)のびすかず(いちにち)あらしふいーさまち(あらしてください)」

「かぎ(きれいな)びすかず(いちにち)あらしふいーさまち(あらしてください)」

良い一日でありますように、すばらしい一日でありますように、という意味である。(北尾 2023a)

(2) 狩俣のシャーカブス

根間義雄さん(昭和 18 年生まれ)は、シャーカブスについて、次のように伝えていた。

「シャーカですね、シャーカとは、早い朝という意味。シャーカブスは、もうほんとこの家庭の主婦が午前3時頃、水を汲みにいくときの時間帯ですね。飲料水を井戸で確保するのですね、なぜ午前3時からという一番鶏が鳴くのですね。一羽がこけこつことなくと、あとは全部鳴いて。ということは、これも意味ありますわね。当時はお墓から幽霊が来て午後9時頃なったらまっくらで幽霊が集まって四辻で集まって、朝の一番鶏が鳴くとお墓にもどっていくという言い伝えがあって」

3. 南西諸島の天文民俗調査の黎明期研究に関する調査記録

(1) ロシア人言語学者ニコライ・A・ネフスキー

ニコライ・A・ネフスキーは、1922 年(大正 11 年)、1926 年(大正 15 年)、1928 年(昭和3年)の3回に渡り宮古島を調査し、数多くの星名、アーク、トーガニを記録した。

i) 星名

ニコライ・A・ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート上』には、次のような星名が掲載されている。(ネフスキー2005a) 各星名の()内は記録地である。なお、カタカナは筆者(北尾)が追記したものである。

- ・ビキラブス bikir'a-busi 男子星ノ意。牽牛星。 biki-r'a:男子 p113(宮古島平良、伊良部島佐良浜)
 - ・ブナラブス bunar'a-busi 女子星ノ意。織女星。 bunar'a:女子 p125(宮古島平良、伊良部島佐良浜)
 - ・フニブス funi-busi 船星ノ意。北斗星。 p184 (宮古島平良、上地)
 - ・ユス[°]フォーブス ju:zfo:busi 宵の明星 (宮古島平良) [沖縄本島、jwbamm é a:] p314
 - ・ナガズウーブス naga 3 u:busi 彗星 p568 (宮古島平良)
 - ・ニーヌパブス ni:nupa-busi 「子ノ方星」ノ意。北極星。p617 (宮古島平良、伊良部島佐和田、伊良部島長浜)
- 『宮古方言ノート下』には次のような星名が記されている。(ネフスキー2005b)
- ・ポーキ[°]ブス po:k^si-busi 「箒星」ノ意。彗星。p93 (宮古島平良)
 - ・プスガマ pusi-gama 小星 p115 (宮古島平良、伊良部島長浜)
 - ・シャーカアガラー sa:ka-agar'a: 暁の明星 p135 (宮古島平良)
 - ・ウシムマピキブス usi-mma-p^sik^si-busi 「牛馬引星」ノ意。牽牛星。p376 (宮古島上地)
 - ・ウフニブス uhu:nibusi 北斗 uhu:ni:大船 p430 (伊良部島佐良浜)
 - ・ウプ라우サギ upura-usagi 明けの明星 upura:大浦。平良村ノ大字。p481 (宮古島平良)

ii) トーガニ

ニコライ・A・ネフスキーは、1922 年 8 月 6 日、伊良部島の村役場で伊良部島長浜生まれの垣花(カチヌパナ)氏より次のような即興歌「トーガニ」を記録している。

「なつゝい ふゆ かわらん にぬばぬ ぷすいがま ユー ふむらだ ていりうり

にぬばぶすいがま ヨー つうあや みやーぎどう ぶすいがまや ながみどう
くらさでい びやーむ ヨー」

(夏も冬も変わらない、子の方の星<北極星>よ。曇らずに照っている、
子の方の星<北極星>よ。あなたを見上げて、星を眺めて、
暮らしたいものだ。)(ネフスキー1998)

「にぬばぬぶす」は「子の方星」という意味になる。即興歌では「にぬばぶすいがま」と唄っている。「が
ま」は小さいという意味で2等星の北極星は小さくて愛しいと親しみを込めて「にぬばぶすいがま」(子
の方の小星)と呼んでいた。

iii) アーグ

伝承地は不明であるが、ネフスキーは、「むてやーがーらぬあーぐ」を記録している。

「にぬばぶすい ぴいていつい なり なやぶすい」

(北極星は ひとつで輝く星である。)

「むてやーがーらや みやーくとうなぎ なやびいとう」

(ムチャーガーラは 宮古中で輝く人である。)(ネフスキー1998)

ロシア人言語学者ニコライ・A・ネフスキーの記録した星名と「トーガニ」「アーグ」は、次のように現在
においても伝承されている。

i) 現在においても伝承されている星名

約100年前にネフスキーが記録した星名が現在においてどのように伝承されているか、次に記す。
「北尾 C」は北尾による現地調査。「北尾 AC」は、北尾によるアンケート調査による記録。

① ブナラブス

『南琉球宮古語多良間方言辞典』に次のように記されており、多良間島においても使用されている。

「ぶなり° ぶす[buna[busɯ]] [名] 織女星。織姫星。」(渡久山他 2020)

② フニブス(北斗)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

フニブス: 漁船や航海中、船員たちが見当にすると云うことから船星と伝えられている。(1983年記
録、話者名: 平良恵勇氏、当時 69 歳) (北尾 AC)

・平良市松原(現 宮古島市)

フニブス: 舟星(1984年記録、話者: 松原の老人クラブ) (北尾 AC)

・宮古郡城辺町保良(現 宮古島市)

フニブス(1984年記録、話者名: 下地金吉氏、当時 71 歳) (北尾 AC)

③ ユス° フォーブス(宵の明星)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

ユス°ファウブス(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

・平良市松原(現 宮古島市)

ユス°フオブス:ユス°は夕はんの意。フオは食べるの意。夕飯を食べる星。(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)(北尾AC)

④ナガズウーブス

ネフスキーは彗星と記録したが、流星を意味した。

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

ナガズウーブス:長く尾をひいて流れていく。流れ星が出たら有名人が近いうち死ぬと云われている。(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

⑤ニヌパブス(北極星)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

ニノパブス:子方ブス(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

・平良市松原(現 宮古島市)

ニヌパブス:ニヌパ、子の方(方角)(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)(北尾AC)

・宮古郡城辺町保良(現 宮古島市)

ニヌハブス(1984年記録、話者名:下地金吉氏、当時71歳)(北尾AC)

・宮古島市荷川取

ニヌパブス:この辺の人、ブス。ニヌパブスめあて船はしらす。父親が石炭を石垣から伊良部までは船で運んだ。そのとき、ニヌパブスめあて。(2019年8月記録、話者生年:昭和11年)(北尾C)

⑥宮古島市松原

ニヌハブス(2019年11月記録、話者生年:昭和5年)(北尾C)

⑦シャーカアガラー(明けの明星)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

シャーカアガリヤ(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

⑧ウシムマピキブス(牽牛)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

ウシムマピキブス:陰暦7月7日七夕の夜、天の川をへだてている織女星と牽牛星が年に一度川を渡って会うという伝説話がある。(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

・平良市松原(現 宮古島市)

ウスウマサダティブス:牛と馬を連れている星。「サダティ」とは、「連れる」の意。(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)(北尾AC)

⑨ウプラウサギ

・平良市松原(現 宮古島市)

ウプラウサギ(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)(北尾AC)

現地調査で次のように記録した。

「ウプラウサギ、ゆーあき(夜明け)や。池間島いけばよくわかるのとちがうか。夜明け3時か4時に出る」

「ウプラウサギ、東側にアガス[°]に出る。東のほうに夜明けに見える。相当、光る星。アガス[°]に出る」

(2019年記録、話者生年:昭和5年、宮古島市松原出身)(北尾C)

ii)トーガニ

①伊良部村史に北極星が唄われている「伊良部タオガニ」が掲載されている。

「ナツフユカワラヌ ニノパノボスガマヨ フモリティヤニヤーン ピテツ、ボスガマヨ

ヴァトヨ、バントマイ ピトツボスニヤーン ド ツムヌカワリテイヤ アラデンマーンヨ」

(夏冬変わらない 北の星よ(北極星) 曇ることのない 一つ星よ

君と僕は 一つ星の如く 心がわりが あってなろうか)(伊良部村史編纂委員会 1978)

②城辺福里の上田長福氏(大正3年生まれ)による「ナツフユ カーラン」に「ニヌパヌプス」が唄

われている。以下、『城辺町史 第6巻歌謡編』より引用する。

「ナツフユ カーラン ニヌパヌ プスガマヨー クムラダ ティリー ウい ニヌパヌ プスガマヨーイー
うヴァヤ ミヤギドゥ サカイヤ イカヨー」[ひらがな表記は中舌音]

(夏も 冬も 位置の 変わらない 子の方の 小星よ 曇らず 照り輝いて いる 子の方の
小星よ あなたを 見上げて カナシャを 見上げて 栄えて icago)

(城辺町史編纂委員会 2000)

※

※

上記の事例は、ネフスキーの記録と同様、夏も冬も一年中位置が変わらず同じところに輝く北極星を唄っている。そして、次の項では、自分の信じる人、愛する人と重ね合わせて多様性豊かな表現で唄われている。

・ネフスキー記録のトーガニ:「あなたを見上げて、星を眺めて、暮らしたいものだ」

・伊良部タオガニ:「君と僕は、一つ星の如く心がわりがあってなろうか」

・ナツフユ カーラン:「あなたを見上げて、カナシャ(愛おしい人)を見上げて、栄えてicago」

iii) アヤゴ(アーク)

『平良市史第七巻資料編5、民俗・歌謡』に、ムティアガラというニヌパブスが唄われた長アーク(長くひっぱってうたう歌)が掲載されている。

「ティン ナームヌヨー ニヌパブスー ピトゥヌ ナームヌヨー ムティアガラヨー」

(天(星)で 名高いのは ヨー(調子を整える語) 北極星 人で名高い者は ムティアガラ(人名))
(平良市史編さん委員会 1987)

(2) フランス人言語学者シャルル・アグノエルの記録したアガリミチブシ

フランス人言語学者シャルル・アグノエルは、昭和5年(1930年)に沖縄県糸満市を訪れ、次のようにアガリミチブシという星名を記録した。

「ten no kami(天の神)[dieux du ciel]=agari-mitsibusi(hoshi)
東ノ三星[les trois étoiles de l'Est]」(Patick Beillevaire 2010)

アガリは、「上がる」という意味ではなく、「東」という意味である。アガリミチブシはオリオン座の三つ星(オリオン座 δ 、 ϵ 、 ζ)を意味する。

アガリミチブシは、糸満の漁師が使用している星名ではない。筆者(北尾)はミチブシ、ミチブシを記録した。アガリミチブシと「アガリ」をつけないかと確認すると「つけない」という答えが返ってきた。

金城誠氏は、ミーチブシ、クガニミチブシ、タテーブシを記録している。金城誠氏は、「夏の漁の時、この星の出現や高さから夜が明けるまでの時間を判断している。また、この星はま東から出て、ま西に沈むので洋上の方位を知るあて星としても使える。そのためか、この星を『重んじられている星だからクガニミチブシとよぶ』の話も今回得た」(金城誠 1986)と記している。

漁師にとって生活に必要な星であるが、アガリミチブシの名前が用いられることはなかった。

1429年、他魯毎(たるみい)は、中山(ちゅうざん)の尚巴志王(しょう はしおう)の攻撃を受けて、南山王国は滅ぼされた。

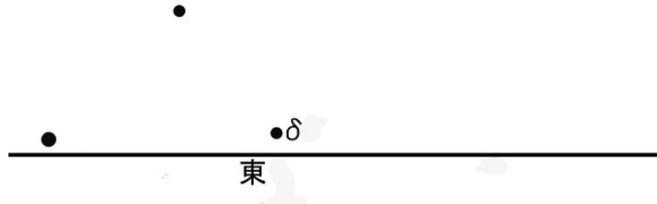
山巔毛には、南山王国最後の王、他魯毎(たるみい)の墓がある。そして、その墓のある山巔毛から見ると、南山城跡の方からのぼるのがアガリミチブシ(オリオン座三つ星)である。これは間違いない事実である。

山巔毛から南側は埋め立てられてしまっているが、かつては海であった。海に向けそびえ、南山城跡からアガリミチブシをのぼる景観のなかでアガリミチブシへの祈りが続いていた。

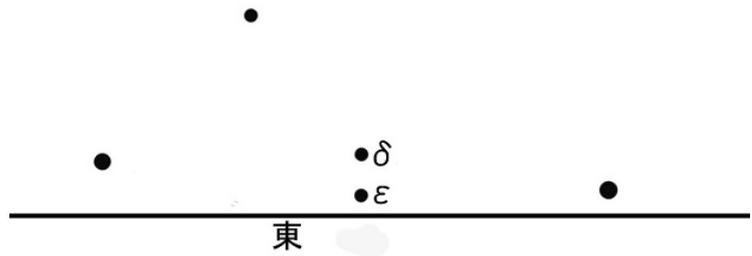
金城善氏は、「筆者は、南山王統の三代の王たちが空に昇っていくのを拝んでいるのではないかと考えるが、アグノエル博士は『東ノ三星』は天の神であると、糸満ノ口から聴いている」と記している。(金城善 2014)

アガリミチブシは、 δ 星、 ϵ 星、 ζ 星の順で縦になって出る。最初にのぼる δ 星は初代の王、その次の ϵ 星は二代、 ζ は三代…と、三人の南山王を想像したのであろうか。

①初代がのぼる



②二代がのぼる



③三代がのぼり南山城の上に輝く

アガリミチブシになった三人の南山王

- δ 初代
 - ε 二代
 - ζ 三代
- アガリミチブシ

東

写真①は卯の端の香炉、②はアガリミチブシの香炉、③は元沖縄タイムス社カメラマンの大城弘明氏が撮影された1986年6月10日のハーレーの取材の写真に写っていたアガリミチブシへの12本の3組の沖縄線香が供えられていた位置である。

アガリミチブシ即ちオリオン座三つ星は東より少し南よりのぼることからアガリミチブシの香炉は①卯の端の香炉よりも南即ち③付近に設置されるべきである。しかしながら、卯の端の香炉①の北側にアガリミチブシの香炉②が設置された。(写真下)

そこで、神役は本来ならアガリミチブシの祈る場所③に近い①卯の端の香炉をアガリミチブシの香炉と判断して最初に祈りを捧げていた。②(アガリミチブシの香炉)は卯の端の香炉と判断して最後に祈った。



福州の緯度も糸満市の緯度もおよそ北緯26.1度である。福州市—山巔毛—南山城跡は、ほぼ同じ緯度になる。アガリミチブシは東より少し南よりのぼるので若干ずれているが、ほぼ東からのぼる星のなかで最も目立つ。この東西の線は意味があるのであろうか。

同じ緯度の航海は、ニヌファブシ(北極星)を右手に見ながら進めばよい。南山時代の北極星(こぐま座 α 星)は現在と違って天の北極より離れていたが、日周運動をして高度を上げて方角を南よりに変えていくアガリミチブシよりは正確である。そう考えるとアガリミチブシを航海の目標にする必要は必ずしもなかったと思われる。

むしろ、アガリミチブシは、南山王の祈りに通ずる世界観、宇宙観を構成するものではないだろうか。今後の課題としたい。



II 北海道の天文民俗調査

1. 北海道二風谷のアイヌ民族の天文民俗に関する調査記録

2009年3月9日(月)～10日(火)北海道平取(びらとり)町二風谷(にぶたに)にて、山道康子さん、昭和21年生まれに聞き取り調査を実施した。

(1) 一番星(シネップノチュウ)になったおばあちゃん

とても無口で、静かな物知りおばあちゃん(クネフチ)がいました。コタンの部落のすみっこにいて、子どもたちにとっても親しくしていました。子どもたちが行くとどんなことでも教えてくれました。ネクラと言われても子どもにとっては、物知りおばあちゃんでした。

年月が過ぎておばあちゃんが亡くなる前、コタンの人がおばあちゃんに声をかけました。

「ネクラと悪口を言ったけど、ごめんなさい」

おばあちゃんにさいごに、「わたしたちにできることはないか」とコタンの人があやまって聞きました。

おばあちゃんは、「私は、暗い夜に生まれて、生きている間も、暗い家のすみでひっそりと生きてきたけれど、私は、やみをいちばん先に照らす一番星(シネップノチュウ)になりたいです」

おばあちゃんが神さまにお願いしました。一番星になりたい、とお願いしました。

「私が一番先に輝いていたなら、夕暮れですよ。あなたがたも、お帰りなさい。そして、けものたちが、腹をすかして、エサを求めて出る時間ですよ。だから、その道をあけてあげなさい。アイヌ(人間)たちは、おうちに帰りなさい」

「洞窟で育った私は、いつも夜の空ばかり見ていた。私は一番星になりたいと思います。私が死んだらクネ(くらい)ばあちゃん、私(クネばあちゃん)がいつも輝いているとき、みんなを守ってるのだ。クネフチが出たら危ない、けもの(クマ、おおかみ、鹿)が狩りをするから、早く道をけものにあけてあげなさい。早く山から降りなさい」(山道康子さんが、二風谷の近くの平賀ヤオキさんから聞いた話)

*

*

一番星をクネノチュウと言っていました。闇夜を守ろうとしていたおばあちゃんが星になりました。

「クネノチュウだ。夕暮れに出る星のことさ。あの星出るとき帰りなさい。クネノチュウが出たと言って、子どもたちは大喜びした」

一番星・クネノチュウが出たら、子どもたちは遊ぶのをやめて家に帰ったのです。

(山道康子さんの母「山道サキさん」(明治44年生まれ、山の向こうの「むかわ町」出身)から聞いた話)

山道サキさんは、クネノチュウ。平賀ヤオキさんは、シネップノチュウと伝えていた。宵の明星の星名と思われる。

『萱野茂のアイヌ語辞典』によると、クネは、「暗い」と「夜」の意味がある。(萱野 2002)

(2) お月さまの水くみになった子ども

あるとき、いろりのそばの子どもにおばあさんが言いました。

「水くみを手伝ってくれ」

子どもはめんどくさがり、いうことをききません。

「ばあちゃんがマキを取って帰るまでに、水を汲んできなさい」

そう言って、おばあさんは、薪(まき)を取りに行きました。

子どもは、イヌンペ(炉縁、イロリのフチ)をたたいて言いました。

「おまえ(イヌンペ、イロリのフチ)はいいな。背中を火あぶりして、あたたかいな」

そして、足元の祭壇を立ったままあしげりして、水くみに行こうとしなかったのです。

クネばあちゃん(クネノチュウ、シネツプノチュウ、一番星)の出る頃、子どもは、水おけを持って、「イロリの灰はここで何もしないでいいな」と、灰をつつきまわしました。

それから、「水を汲まない」と、おけをふり、ピサク(柄杓)を持って、川に降りて行きました。

しかし、子どもは、水を汲むのが嫌で川で遊んでいました。

おばあさんが家に帰ると、その小僧(子ども)がいません。おばあさんは、きっと水汲みに真面目に行ったのだろうと、川を降りていきました。ところが、子どもはいません。桶(おけ)が1つ置いてありました。

おばあさんは、川の魚に、「アメマスさん、私の子どもを知りませんか」と尋ねます。

すると、アメマスは、「あの怠け者は、(アメマスのことを)斑点だらけの悪いやつというので教えない」と、教えてくれません。

(以下のドジョウの部分は、山道康子さんが山道サキさんから聞いた話。二風谷は昔は沙流川にドジョウがたくさんいた)

困ったおばあさんは、「どじょうさん、どこに行ったか」と尋ねると、「川のつるんつるんで変な奴と言ったので教えない」と教えてくれません。

おばあさんは、海の近くまで歩いて、へとへとです。

「怠け者の子どもは、どこに行った。早く帰って！」

海の近くに行くと、サケがあがってきました。

「カムイチップ(神の魚、サケ)さん、あなたは私の子どもを知ってるのではないか」

おばあさんが、サケにそう尋ねますと、カムイチップ(サケ)は、「ぼくのことをカムイチップ(神の魚)と、子どもが言ったので教えてあげるよ。空を見てごらん。あれ、お月さんのなかに神さまに入れられちゃったよ。あのなかに持っていかれたんだろ。文句ばかり言ってるから、神さまが怒って、月へ連れて行った。桶(おけ)を持った小僧が立ってるんだよ」

それからというものの、怠けてる子どもに、「お月さんが怒(おこ)って、あのなかに持っていきよ」と言うと、子どもは、言うことを聞くようになりました。

※

※

上記の伝承は、山道康子さんが、平賀ヤオキさん(富川)、山道サキさん(二風谷)から聞いたものである。山道サキさんに、言うことをきかないと、「お月さんに入るから」と、おどされた。山道サキさんは、「どじょう」と言った。

山道サキさんは、「桶(おけ)とピサック(柄杓)を持って、あそこに立っているんだよ。ウサギが杵(きね)を持って立っているのは、嘘だよ。アイヌの物語をウサギに変えられたんだよ。山道サキさんは、「勝手に変えられた」とおこっていた。

(おけ;しらかばで作った。おけ、ひとつ。(天秤棒でおけ2つはこぶのは和人の文化)、ピサック(柄杓);しらかばの皮)

月の中の子どもの話を、更科源藏氏編著『アイヌ民話集』と比較すると表1のようになる。(更科 1963)

	更科源藏『アイヌ民話集』	北尾記録
主人公	娘	男の子(小僧)
炉	小刀で炉縁に傷をつけて、「お前は炉縁だから、年中背中あぶりばかりして遊んでいて、水汲みをしなくてもよいから…」	イヌンベ(炉縁、イロリのフチ)をたたいて、「おまえ(イヌンベ、イロリのフチ)はいいな。背中を火あぶりして、あたたかいな」
続いて	家の柱に手桶をぶっつけながら、「お前も柱だから仕事をしないで…」	「イロリの灰はここで何もしないでいいな」と、灰をつつきまわしました。
おばあさんは川へ	川原の砂の上に履物だけがあって、どこにも姿が見えない	子どもはいません。桶(おけ)が1つ置いてありました。
魚1/消息を訪ねた答え	赤腹ウグイの群れ/「あの子は、オレたちのことを、骨だらけで食えない奴だといって悪口をいうから、知っているけれども、行先きを教えない」	アメマス/「あの怠け者は、(アメマスのことを)斑点だらけの悪いやつというので教えない」
魚2/消息を訪ねた答え	いとうの群れ/「お前たちは、オレたちを獲っても、肉のまずい奴だといって木の枝にひっかけたりして、粗末にするから、子供の行った先きは教えない」	どじょう/「川のつるんつるんで変な奴と言ったので教えない」
魚3	鱒の群れ/「お前たちは、オレが川にのぼったところは大事にするが、老魚(ホッチャレ)になると大事にしないで投げるから、教えてやるものか」	なし
さいごの魚	鮭の群れ/「お前たちはオレを大事にして神魚(カムイチエブ)神魚(カムイチエブ)といって、骨まで粗末にしないから教えてやるが、お前の娘は水汲みにきてお月さんはいいな、何もしないで黙ってればいいが、オレは家にいるとなんだかんだと使われる、といってお月さんを見ていたので、お月さんがなまけもののみせしめに、月の中へさらって行ったのだ」	カムイチップ(サケ)/「ぼくのことをカムイチップ(神の魚)と、子どもが言ったので教えてあげよ。空を見てごらん。あれ、お月さんのなかに神さまに入れられちゃったよ。あのなかに持っていかれたんだろ。文句ばかり言ってるから、神さまが怒って、月へ連れて行った。桶(おけ)を持った小僧が立っているんだよ」
結果	母親が泣く泣く見ると、月の中に手桶をもった子供の姿が見えた。	それからというものの、怠けてる子どもに、「お月さんが怒(おこ)って、あのなかに持っていきよ」と言うと、子どもは、言うことを聞くようになりました。

表1 月の中の伝承の比較(アイヌ)

2. 北海道各地の環状列石、星の和名伝承、七夕行事に関する調査記録

(1) 北海道各地の環状列石に関する調査記録

北海道には次のような環状列石があり、天文とのかかわりについて指摘されている。

① 音江の環状列石

複数の環状列石があり、その配列が北斗七星に似ている。北海道深川市。

② 小樽忍路の環状列石

観測に使われた立石の配置は見られない。

③ 余市の環状列石

日時計状の立石は、明らかに日時計でない。余市の環状列石から夏至の日の入りを見るとシリパ岬の先端に太陽が沈む。(北尾 1976)

上記③の夏至の日の入りは地図で算出したのみで、実際に確認をしていなかった。2022年6月21日、余市の環状列石より夏至に沈む太陽の撮影を行ない、ほぼ先端に沈むことを確認した。

写真下左：日時計状の立石

写真下右：2022年6月21日19時06分撮影のシリパ岬のほぼ先端へ沈む太陽



(2) 北海道各地の星の和名伝承に関する調査記録

北海道の星の和名伝承を記録することに対し、移住地だから意味がないとい指摘されたことがある。星名伝承をより古い形のを記録するにあたって、松前藩以降の移住先での伝承に価値を認めないという立場であった。しかし、北海道の和名伝承調査は次の2点から重要である。

・星名伝承は、常に人の移動によって伝播されていくものである。たとえば、スバル系の星名伝播は北前船とともに津軽まで及んだ。その結果、下北半島と津軽半島は全く異なるプレアデス星団の分布となった。人の移動に伴う伝播は、時間軸とともに当然のことながら進んでいく。その営みのなかで北海道を含めないのは問題である。

・移住元の伝承が消えても、移住先で伝えられているケースがある。伝承の全体像を知るために、北海道を調査の対象外とすることは問題である。

特に、イカ釣りの目標にする役星についての研究にあたって、北海道は重要である。以下、地域ごとに北尾が記録した伝承資料を記す。

①礼文島

事例1 北海道礼文郡礼文町船泊村江戸屋

ウヅラボシ(プレアデス星団)の出をイカ漁の目標にしていた。

「ウヅラボシと昔の人は言ったようじゃったけどな。七つくらいかたまつたクチャクチャと出るやつある。あの星が出てくりやイカつくとか。水平線からね、出てくるとイカついてくるとかやったもんだ」

「ウヅラボシあがってきたからイカつくぞ、とか言ったもんだね。潮が変わってくるのでねえか…」

「ウヅラ豆てのあるね。なんかね小さい豆でね。なるほどあの豆を表現して言ったのかね。あんまり大きな星でないけどピカピカッと光ってクチャッとかたまって出てる」(話者生年、大正12年)

(ポイント、六連星→ウヅラへの転訛。本来の意味を失いウヅラ豆)

事例2 北海道礼文郡礼文町香深村

メシタキボシ(明けの明星)、ウヅラボシ(プレアデス星団)、サンコウボシ(オリオン座三つ星)の出を、イカ漁の目標にしていた。

「メシタキボシ、明るい星、上がってる。はやくに、まだ暗いうちにね。それをメシタキボシとか言って、そういうのを丹念して。いま出てくるから潮が変わるって、そういうものを丹念して。ひとつの星、メシタキボシ。メシタキボシ、飯炊きに起きた。ご飯をたくのに、昔、住み込みで、若い衆が…」

「サンコウボシ、いまでも三つあるよ。サンコウボシは、早く出てるな。三つ並んで出るのが」

「ウヅラボシとか聞いた。ウヅラって、鳥の鶉の卵のようなもんなのだべさ。鶉の卵のようにたくさんこまかい明かりがかたまってる」(話者生年、昭和8年)

(ポイント、六連星→ウヅラへの転訛。本来の意味を失い鳥の鶉の卵)

②利尻島

事例 北海道利尻郡利尻富士町鬼脇

9月～10月、宵から始めたイカ漁の終わりの時間をスバルボシで知った。

「スバルボシ、上に来たら宵のイカ、終わりだ。帰るか」

「マスボシ、四角の柵みたいな。待てやマスボシ、駆けつけば(ついてこい、追いかけてこい)スバルボシ」

マスボシは、オリオン座三つ星と小三つ星と η 星。マスボシがスバルボシに待ってくれと言うと、スバルボシは追いかけてこいと言ったのである。(話者生年、昭和5年)

(ポイント、マスボシがスバルを追いかける。西の空で追いつく)

③積丹半島

事例1 北海道積丹郡積丹町美国町(1979年調査)

イカ釣りの漁師さん(明治41年生まれ)は、最も遅くのぼってくるシリウスの出にいちばんイカが釣れると伝えていた。

「それからやっぱり2時間か2時間ちょっとあまりあとに、アオボシという星があがるの。数ある星のなかでアオメしてひかるの。その星がいちばんつく。その星とアカボシがつくの。どっちの星もつくけど、アオボシちゅうのがいちばんつく。完全につくた。そのかわりずっと時間がおそいのよ」

アオボシはシリウス、アカボシはアルデバランのこと。実際はシリウスは白色だが、青色と観察し、アオボシと呼んでいるケースが多い。(話者生年、明治41年)

(ポイント、最もイカがつく星はシリウス)

事例2 北海道積丹半島古平(2007年調査)

漁師さん(積丹半島の入舸出身)によると、5月くらいからスルメイカをした。5月は小あみ、定置。スルメイカを釣るのは、6月から9月だった。トンボとか、ハネグで6月から釣った。8月から、大きいイカが釣れた。昔は、9月も釣れた。11月から屋間も釣れた。

「星の出、星の出って。今、夜明けの星とか、サンコウの星だって」

「星の出なれば、イカ騒ぐ」

「サンコウ」は、オリオン座三つ星のこと。終戦後、古平でイカつけをした。磯周りをして、ウニを取ったり、イカつけをしたりした。年とった人と沖さ行く。そして、古平の明治生まれの人から、「星の出、星の出」と聞いた。

「アオボシいうのある。アオボシいうの、ヨアサなってから出る。朝方、8月とか出る。9月のときも出る。アオボシ。光る星だった、アオボシって」

続けて、8月の明け方から東の空に現れるシリウスの和名「アオボシ」について記憶をたどることができた。

「アオボシ、サンコウの出、さわぐ。星の出まで眠る。星の出なれば、イカさわぐから、それまで寝る」

漁師さんは、イカ釣りの目標となるサンコウ、アオボシ等を、先祖は新潟出身の年上の漁師さんから教えてもらった。

星の出まで眠る。星の出と出の間は釣れないのだろうか？

「釣れる。星の出なくても、釣れるよ。たまにぼちぼちと釣れるとき、そのときによって、ずーとついてるときもあるけど、切れるときもある。夏は、切れるとき多い。秋なれば、平均にさわぐ」

漁師さんによると、夏は切れる即ち星の出と出の間は釣れないことが多かったが、秋になると平均して釣れるようになった。産卵に近くなって、子が入っていて、イカの目が星の出を気づきにくくなって、平均して釣れるようになったのだろうか。

「ヤリイカは、星関係ない」。

漁師さんによると、星の出をめあてにするのはスルメイカだった。

なぜ、星の出に、イカが釣れるか尋ねると、「昔からそんな話してた。年寄りの人、みんな言ってた」という答えが返ってきた。

そして、「イカつけ、やった人、年寄り、みんな、亡くなった」と寂しそうに言った。

星の出をめあてにした人は亡くなってしまった。利尻、海馬島に、イカつけに行った人は、もういない。

「イカは1年ぐさ。春生まれた。来年の春までに、子生んで、死ぬ。スルメイカは、12月に生む」

「ハネグとかトンボ。イカついたら、ハネグ使う。星の出たとき、イカが浮いてくれば、ハネグがいちばん。ハネグの上手な人、倍取る人もある。俺のおやじ上手」

「トンボ、エサつけねえ。はりだけ。はり、二重なって。骨で作った針、鹿の角で作った針が釣れる」

ハネグのエサに、半日干したイカを巻く。毎日、エサをかえる。エサを変えたら、その日は、エサをつけたままだった。

「スバルってのは、光る星。サンコウ、早い。アオボシ、遅い。最後、ヨアケノミョージョー」

(話者生年、大正7年)

(ポイント、夏は星の出と出の間はつれない傾向。秋になると平均して釣れる傾向)

事例3 北海道積丹郡積丹町幌武意町

ウヅラボシ(プレアデス星団)の出を、イカ漁の目標にしていた。ミツボシ(オリオン座三つ星)は、目標にしなかった。

「星、ミツボシとかな、なんだったかな、こっちのほうで星。ウヅラボシって言ったかな。東の空にね、出るんですよね。ウヅラボシとかね。学校終わるとすぐ漁師やってね、おやじと二人でね。小さい磯船で、イカつけに二人で乗ってね」

「ウヅラボシって、11時頃、東の空からあがってくる。かたまっ、三つか、四つ、かたまっあがってくるの。海から。その星があがってくる頃に、イカがつきだしてくる。その星があがってくるまで起きてるの。豊漁のときはすぐつく。漁のない日もあるから、その星のあがるまで待つ」(話者生年、昭和9年)

(ポイント、プレアデス星団のみ目標)

事例4 北海道磯谷郡蘭越町

星だけでなく、潮の変化を合わせて観察しなければならないと伝えていたケースである。話者は、明治40年生まれの大西さんだった。

「どの星のときにでも、イカがつくとは限らない。潮と星の出が合致するとつく、と、わしらは、丹念している。サンコウの出にきのうついたからといって、今日つくとは限らねえ。潮と合わなければだめだ」

大西さんは、「能登星」という星の名前も伝えていた。能登星は、積丹半島西海岸の泊村で明治45年生まれの漁師さんが伝えていた星名で、ぎょしゃ座カペラのことである。

能登星はもともと、福井県に伝えられていた。福井県三国町で、石森藤四郎さん(明治43年生まれ)は、能登半島にのぼる能登星について伝えていた。

「半島の先よりちょっと、内側からひとつぼしであがる」

北海道泊村、蘭越町から能登半島を見ることは不可能である。沖に出れば、積丹半島からのぼるカペラを見ることができる。しかし、積丹星と言わずに能登星と言った。(話者生年、明治40年)(ポイント、能登星)

④函館・松前・恵山地方

事例1 函館市川汲の星の語り部

2008年9月6日、川汲(かっくみ)(南茅部)の谷地町バス停近くの海岸で昭和4年生まれの漁師さんと出会う。川汲にやってきて7代目だった。

「晩かたになればね。季節、季節によって、星がちがう。一般的なのはね、ムヅナボシという、4つか5つこう、かたまつた星が出れば、そのころなれば水があるという。海の水が変わる。水がキラキラ光るわけ。まもなくイカがつくぞ！と。ムヅナボシという。ムヅナって、タヌキという意味だよ。それをムヅナ。6つ、こう出でですね。ちょっとこうかたまつて。それをムヅナボシという」

ムヅナボシは、ムツラボシ(六連星)が変化したもので、プレアデス星団のこと。確かにタヌキすなわち猪(ムジナ)という言葉に似ている。

「ほかに星はあったのですか」と尋ねると、「ほかにあるよ。それからね、朝、夜明けに出る星はね、ミョージョー。アケノミョージョー。それでもイカつく」と教えてくれた。

アケノミョージョーの出にイカがつく。明けの明星の出にもうひとがんばり。まもなく仕事を終えて帰る時間だ。

オリオン座の星名の記憶をたどることができない。

「3つん並んだ星あるのですか」と尋ねると、「あるよ。ミツボシね、その星の出る頃は、その時間帯に、イカがつく」と教えてくださった。

「ミツボシ、3つこうななめにね。並んでる」

こちらではサンコウと言わない。ミツボシと言った。ムヅナボシもミツボシも夏イカのとき目標にしていた。

「そうそう、みんな年寄りから聞いたのを忘れないで」

小学6年生の頃からトンボでイカつけた。星は学校で習ったのではなく、年寄りから世代をこえて伝えられてきたものだった。星でいちばんよく釣れるのはどの星か聞かすが、いちばんよく釣れる星は、「特にない」という答えがかえってきた。

「ムヅナボシあがったからって、イカ釣れるわけねえ。そのときの時間帯でね。ムヅナボシあがればそろそろつっころだぞ！と。ミツボシもあがるころならば、そろそろつこよ、と。まだ確かあたった…」

まだほかの星があったが、記憶をたどれない。ムヅナボシがのぼったあと3時間ほどでミツボシ。2時間ほどでアケノミョージョーがのぼる。星の出と出の間は支度した。星と星の間も少しは釣れるので休まなかった。(話者生年、昭和4年)

(ポイント、六連星からムジナボシへ転訛。ムヅナボシは狸という認知)

事例2 函館市尾札部

北海道函館市尾札部町で2人の昭和7年生まれの話者 AさんとBさんに出会った。

・Aさん…ミツボシの出でイカが釣れると伝えていた。語り部によると、イカ以外の魚、例えばワカサギも、ミツボシの出で釣れた。

・Bさん…尋常高等小学校のときからイカ釣りに歩いた思い出を、「サンコウで、ミツボシあるでしょ、こう3つこう、たてに並んだ。サンコウの出で、昔はそう言ったもんだよね」「やっぱり丹念していれば、その時間帯なればつくとかさ。あまり月明かりがいいときは、漁なかったものね」と語った。サンコウの出にイカが釣れたのである。(話者生年、昭和7年)

(ポイント、同じ地域でサンコウを伝えているケースと伝えていないケース)

事例3 北海道松前町江良

昭和13年生まれの話者は、1950年代、1年間ほど漁師をした。当時は昔ながらの漁だった。わずか1年の経験だが、語り部は星と生活のかかわりについて伝え聞いていた。

「ムヅナボシ、今で言えばスバルだ。6つ出てかたまってるからムヅナボシいうんだ。今で言えばスバルだべな。ここの漁師の人はムヅナボシ。6つこうなって。その出に潮が沖からつっこむいう

「夏の8月頃なればね、あそこの山からちょっと出るんだ。東だべな。それがだいたい夜中のね、11時か12時ごろにな、今頃」

ムヅナボシはスバルすなわちプレアデス星団のこと。

「その星をみて、いつあがってくるべていうので、朝になればね、潮が沖から突っ込み潮ってね、潮がはいってくるならば、わたしはまだ若いもんだから、ハネゴ使って。年いった昔の経験者はな、大正の初期生まれだとか明治の終わり頃生まれとか、ハネゴとか、30分やそこらでね、だいたいイカの数にして400か500くらい、釣ってるんだ。ひとりで。私はまだ若いものだから、こんなに経験者でもってちがうのか思って。潮がよいからプランクトンあつまるもんだからね」

「潮のかげんで。ムヅナボシ出たなれば、沖から潮がオカ(陸)さ突っ込む。潮が変わるんですよ。それが、むかしの漁師がムヅナボシあがったとか、サンコウというのかな、サンコウの星があがれば、どーのこーの。潮がかわってな」

星の出は、沖から潮が突っ込んできたのである。星は、ムヅナボシだけでなく、サンコウ(オリオン座三つ星)も目当てにした。

「サンコウボシあがれば、世の中に化けて出るというてね。サンコウあがりなれば、世の中に化けて出る。イカがつく時間だけどな。サンコウボシあがれば、世の中に化けて出ることは、化けてでるほど、イカがたくさんつく」

サンコウボシの出にたくさん取れたことから、「イカが化けて出る」という伝承が生まれたのである。

(話者生年、昭和13年)(ポイント、サンコウという星の出に取れることを「イカが化けて出る」と認知)

事例4 北海道亀田郡恵山町豊浦(函館市豊浦町)

昭和7年生まれの話者は、星の出とイカ釣りについて伝えていた。

「アオボシ、ひかり、違う。サンコウが先にあがる」

「シバレ、3つサンカク」

「サンコウ、3つならんでる」

「シバレ、サンコウ、アオボシ、ヨアケノホシの順にのぼる」

「シバレとサンコウのあいだは1時間。サンコウとアオボシの間は2時間。そのあいだはよけいつかなかった。上にあがったらハネゴ。星と星のあいだでも上あがたらハネゴ」

8月、9月、10月、11月、シバレ、サンコウ、アオボシ、ヨアケノホシ…と順にのぼる星の出にイカが釣れた。

サンコウはオリオン座三つ星、アオボシはシリウス、ヨアケノホシは明けの明星。

シバレはスバルが変化したものでプレアデス星団のことと思ったが、三角ということとサンコウの出まで1時間ということからヒアデス星団とアルデバランで作るV字形のことかもしれない。(話者生年、昭和7年)(ポイント、スバルの転訛の可能性のあるシバレがヒアデスとアルデバランで作るV字である可能性)

事例5 函館市入舟町

大正10年生まれ漁師さんは、入舟の山背泊(ヤマセドマリ)出身だが、父親から元は能登から来たと聞いていた。

イカ釣りは、佐渡の人が明治時代にイカバリ、又なった上に真鯨のオモリがついたついたトンボという道具を作ったのがはじまりだった。いい港だった。移住してきた人が(ヤマセドマリ)の名前をつけた。ヤマセの風なると函館山の陰になる。風吹いても、屏風の陰みたいで、いい風(なぎ)なる。だから、ヤマセドマリと名づけた。

「星の出、夏過ぎて秋はじめなる、夜中過ぎ、2時か3時にミツボシって、こらの人はサンコウ。ちょうど同じような間隔で明るい星が、出てくるわけだね。サンコウの出、丹念してる。その星の出あたりになると、特別、気つかって一生懸命釣る」

「サンコウ、東のほう、そのあとに、もう夜明け近くなると、今でいえば火星？オオボシいう。東の空から上がってくると、やがて夜明け。星をあてにしてイカ釣る。サンコウの星、ヨアケノミョージョー。オオボシいう」

サンコウはオリオン座三つ星。ヨアケノミョージョーは金星。オオボシはシリウスだろうか。

「星の出と月の出。月が満月から小さくなってくると、45分ずつ遅くなる。やがて月なくなるんだけど。月の出、一番重要な釣れる時間です」

星の出とともに月の出を目標にした。

「スバリってのは日が暮れて、その時期時期で、スバリって。上がる時間、一定していない。9月、10月、9時頃なるとあがる。スバリ、Yの形、7、8つある」

「サンコウは、スバリが高く上がってから、あとに上がってくる。間隔、同じように明るい星3つ」

スバリは、スバルから変化した呼び名でプレアデス星団のこと。スバリは、9月になると夜9時頃のぼると教えてくれた。星が輝いてよく見えるのは秋。夏はかすみであまり見えない。秋になると澄み渡る。星がきれいに見える。

「オオボシ。アオボシいう人もいる」

シリウスをアオボシという人が多く、北海道に広く伝承されている。しかし、大正10年生まれの漁師さんは、アオボシでなくオオボシと言った。(話者生年、大正10年)(ポイント、アオボシという星名を知らながら、オオボシを使う)

事例6 函館市住吉町

函館市住吉町の昭和7年生まれの漁師さんはイカ釣りの目標にしていた星について語ってくれた。

「アオボシとか、ムヅラボシって、6つ7つ星が固まって出るでしょ。ムヅラボシ、アオボシ、サンコウで3つ」

「ムヅラボシって、かたまってる。だいたい6つくらいかたまってる」

「アオボシ、いちばん釣れる。青い」

「ムヅラボシ、一番最初。ムヅラボシ→サンコウ→アオボシ、ヨアケノミョージョー」

ムヅラボシはプレアデス星団。サンコウはオリオン座三つ星、アオボシはシリウスのこと。

アオボシが明るい星であることをサンコウを三つまとめたくらいと説明して下さった。

「アオボシは、大きい。サンコウ、三つまとめたくらい大きい。アオボシ、大きい星、すぐわかる」

スルメイカは、夜ばかりだった。、6月から1月中旬、日が暮れた頃、出ていく。

雲で星見えないときどうするのか尋ねると、「いまごろ上がるんでねえべかいう憶測。見えなくて、曇っていても、だいたいその時間、星が上がってくる頃釣れる」という答えがかえってきた。(話者生年、昭和7年)(プレアデス星団を六連星の転訛したムヅラボシという。函館には、六連星系とスバル系の両方が伝えられている)

(3) 北海道各地の七夕行事に関する調査記録

七夕のときのローソクもらいが、下北半島や佐渡では消えてしまっても、北海道で伝えられている。ふるさとを離れたとき、ふるさとの行事を丁寧に行ない、伝えた。北海道だけでなく、樺太でもそうであった。

① 北海道利尻郡利尻富士町鬼脇

樺太出身で、樺太内幌の七夕について伝えていた。

「提灯を持って二、三人で歩いた。柳の木に天の川とか短冊をつけた。柳の木は持って歩かない」

また、「たなばたまつりロウソク出せよ、出さねばかつちやくぞ」と歌いながらローソクをもらって歩いた。(話者生年、昭和5年)

楽譜 樺太内幌七夕の歌 採譜者 北尾正子

ヒナバタまつり 3うそくだせよ

たなばたまつり

事例2 北海道積丹半島古平

大正7年生まれの人(積丹半島の入舸出身)は次のように伝えていた。

「ローソク出せ出せ、空き缶に穴あけて、ふたとって。ヒモつけて、熱くないように。ローソク出せ出せ、と来たら、ローソクをやるもんだ。3銭もらったり、5銭もらったり、お菓子もらったり、ローソクをもらったり、入舸の頃、7、8歳の歳にやった。ローソク出せ出せ、あった。大泊(樺太)の頃、ローソク出せ出せやった。10～12歳だった。ローソク出せ出せ、出さねば、かっちゃくぞ。8月7日。7日の晩。柳の木に、たくさんつけて、柳を持って歩いた。カンテラ持って歩いた。子ども10人くらい、ひとかたまりなつて、歩いたことあったよ」

七夕に歌った歌の事例(北海道白滝村、函館市・北斗市)でみられるように、メロディー、歌詞には地域により異なっていた。(楽譜参照)



III 天文民俗・天文考古および認知天文学的な分析・考察

調査データから、科研の目的に沿った天文民俗・天文考古および認知天文学的な分析・考察を試みる。

(1) 日本列島で生活する人びとにとっての北極星(こぐま座α)

星は、人びとの暮らしにとって、どのような意味を持ってきたのであろうか。人びとは、どの程度、星を見てきたのであろうか。人びとの生活のなかで、星は、山や海と同様、日常的な景観であり、生活及び生業と密着した自然環境のひとつであったと考えることはできないのであろうか。

星は、時間軸、空間軸のなかで決められた動きをする。

まず、時間軸を考えると、一日単位の日の出からの昼の時間、日の入りからの夜の時間がある。暮らしを維持するための生業は、昼も夜も行なわれた。星はまさに一日単位の時間軸では時計であった。この時間軸を一年単位で考えたとき、星は、播種の季節、漁の季節等、生業における時間軸の位置を決定するカレンダーであった。

時間軸のなかで星の動きは連続したものであった。古代から連続して途切れることなく繰り返され、今日があり、そして未来がある。そのなかで闇と明かりは、あるときは信仰を、あるときは神話、昔話を形成した。そして、語り、唄った。

次に空間軸を考える。人間は、古代から連続して、空間軸を移動していった。人間は古代において船を空間軸移動の手段として持つことができた。その空間軸の移動は、しばしば星空の下で行なわれた。空間軸の移動とともに、星の見え方が変わっていった。

北極星の場合、空間軸の移動とともに、高度が変化していく。

日本は、南北に長い。もっとも北の北海道宗谷岬は、北緯 45 度 31 分 22 秒、有人島でもっとも南の沖縄県波照間島では北緯 24 度 2 分 44 秒と、20 度以上ちがう。従って、北極星(こぐま座 α 星)の高度は 20 度以上も異なり、最北端の高度は、最南端の倍近くになる。

北海道、北緯45度ということは、北極星の高さも約45度。したがって、北極星を見るためには首を曲げて見上げなければならない。北大と鹿児島大の寮歌にその違いが唄われている。

北大の寮歌…「おごそかに 北極星を仰ぐ哉」

旧制第七高等学校(現 鹿児島大学)の寮歌…「いざや歌わんかな北辰斜め」

北海道では、仰がなければ北極星を見るができない。北海道大学(札幌市)の緯度は北緯約43度、北極星を見るためには仰ぐ必要がある。一方、鹿児島では北海道のように仰がなくても斜めに見えると歌う。鹿児島大学(鹿児島市)の緯度は北緯約31.6度、まさに仰がなくても斜めに見える。

日本列島における北極星を認知するにあたって、空間軸における相違が要因のひとつとなる。

◆目の前に北極星が見える地域

沖縄・奄美地方が目の前に北極星が見える地域に属する。

最も北の奄美大島の笠利崎灯台は北緯28度31分46秒、最も南の波照間島の緯度は北緯24度2分44秒で、緯度の差は約 4.5 度ある。

北極星の高さは、奄美大島、喜界島では 30 度に迫るが、沖縄本島以南では25度前後、首を曲げて見上げなくてもよい。目の前に北極星が見えているという星空景観になる。だから、北極星(ニヌファブシ)を目当てにして多様で豊かな伝承が形成される。(北尾 2023a) (北尾 2023b) (北尾 2023c)

(右図:宮古島の北極星の星名分布図)



◆斜めに北極星が見える地域

それほど首を曲げなくても北極星を見ることができる地域である瀬戸内海が属する。徳蔵の妻の北極星の動き等が伝承形成された地域である。

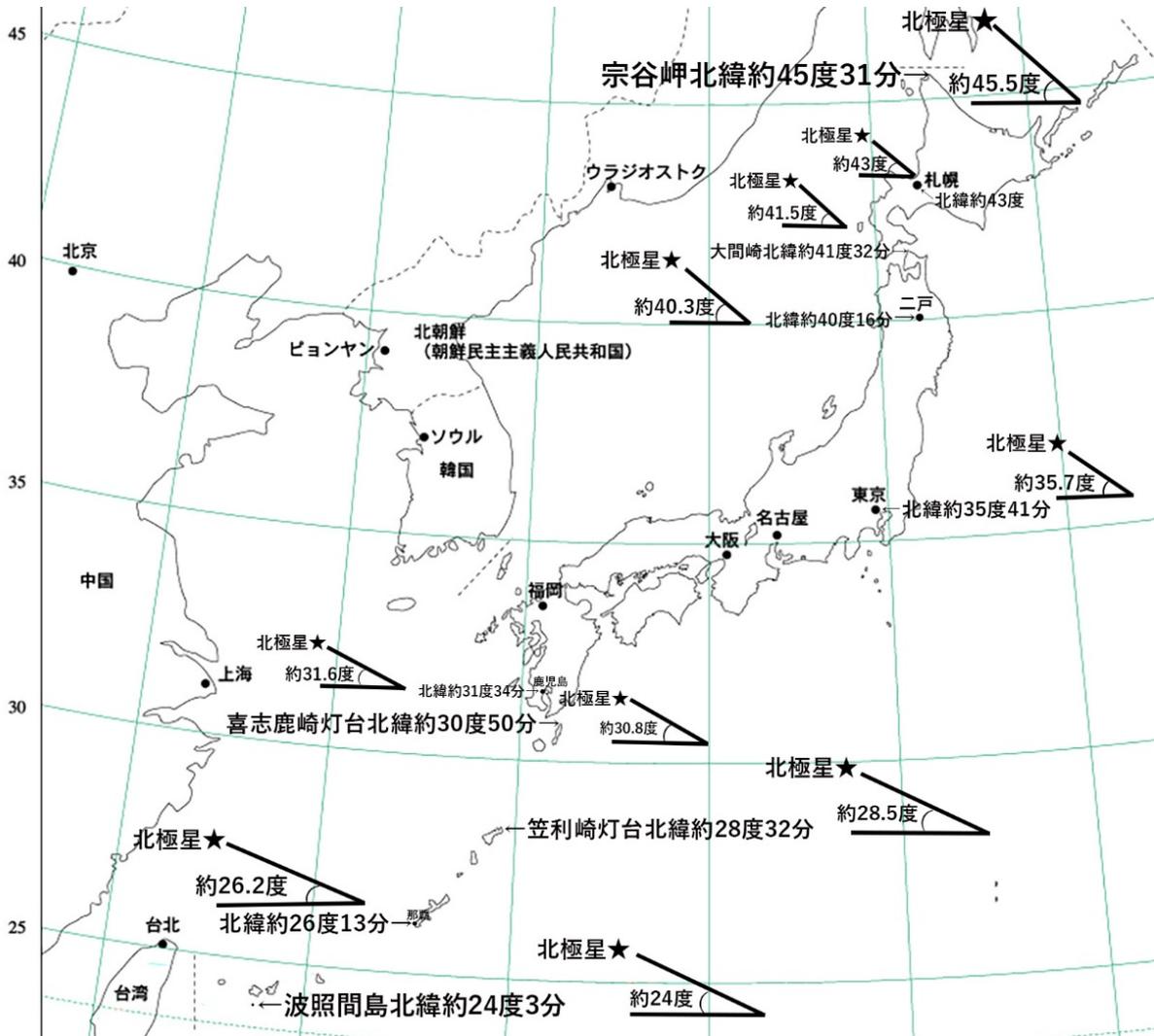
スバル、スマル等、瀬戸内海で記録されている星名は、津軽半島まで伝えられたが、ネノホシ、ネノホシの動きを発見する徳蔵の妻の伝承は伝えられていない。

◆北極星が伝承形成されない傾向にある地域

前項、北海道に伝わった和名伝承の項に北極星の伝承は記していない。北海道には、ネノホシ(北極星)の和名伝承を記録する機会にはほとんど恵まれない。北極星が45度となると、方角を知る目標にするには高すぎる。

また、アイヌにおいても多様で豊かな北極星(こぐま座 α)の星名形成はされなかった。方角、時間の目標としてシリウスが用いられた。方角を知るために北極星ではなく、シリウスをチアヌプノチウ(あて星)として方角と時間を知った事例がある。(末岡 2009)

- シリウスの高度は低く、方角と時間を知るのに役立つ。末岡氏が書いているポイントは2点である。
- 川筋の段丘に散在するコタンや山間で見える期間はずっと短い。従ってこの方向性が高められる。
- 冬獵のときの方角と時間を知る手がかりにしていたという。



(2) 日本列島で生活する人びとにとってのカノープス

日本列島で生活する人びとにとってのカノープスは次の3地域に分かれる。

- ◆カノープスを認知することができない地域…東北地方、北海道のカノープスを見ることができない地域。星名形成はなされない。
- ◆カノープスを水平線ぎりぎりに認知することができる地域…カノープスの星名伝承の最北端茨城県北茨城市(わずか高度0.8度)、千葉県房総半島、瀬戸内海地方では、カノープスが水平線ぎりぎりに見え、横着星や布良星等の星名形成がされた。
- ◆カノープスの南中高度が高く容易に認知できる地域…奄美大島で南中高度約9度、那覇市で南中高度約11.2度、波照間島で約13.3度となり、水平線ぎりぎりではなく、横着星と呼ばれるような見え方をしなくなる。その結果、近くの他の星(シリウス、リゲル等)と同じように

東からのぼり西に沈む普通の星となり、星名伝承形成される特徴ある認知へと結びつかなかった。

(3) 日本列島で生活する人びとにとっての北斗七星

日本列島で生活する人びとにとっての北斗七星は次の3地域に分かれる。

- ◆周極星として北斗七星を認知する地域…北海道においては、北斗七星のすべての星が周極星となる。アイヌにおいては、多様で豊かな伝承形成の要因になった。
- ◆北斗七星の一部の星が周極星として認知する地域…一部の星であれ、北斗七星全体がほぼ周極星として認知可能で、例えば愛媛県石鎚山において、「スマル、カセボシは入るくがあるが、私はチソボシ入るくない」というような伝承が形成された。(チソボシ:四三の星。北斗七星)
- ◆北斗七星のすべての星が周極星として認知する地域…奄美大島北部を除いて沖縄・奄美の北斗七星のすべての星が周極星にならない。北斗七星が全て沈む沖縄においては、ムリカブシユンタ等での唄に反映された。

(4) 星、そして暗黒星雲に暮らしを描く

星と星をつないで生活道具を描いた。さらには、波照間島のビタコリブスイのように暗黒星雲(天の川の黒い部分)にウナギを描いた。星の輝かないところも観察し語った。(北尾 2021)

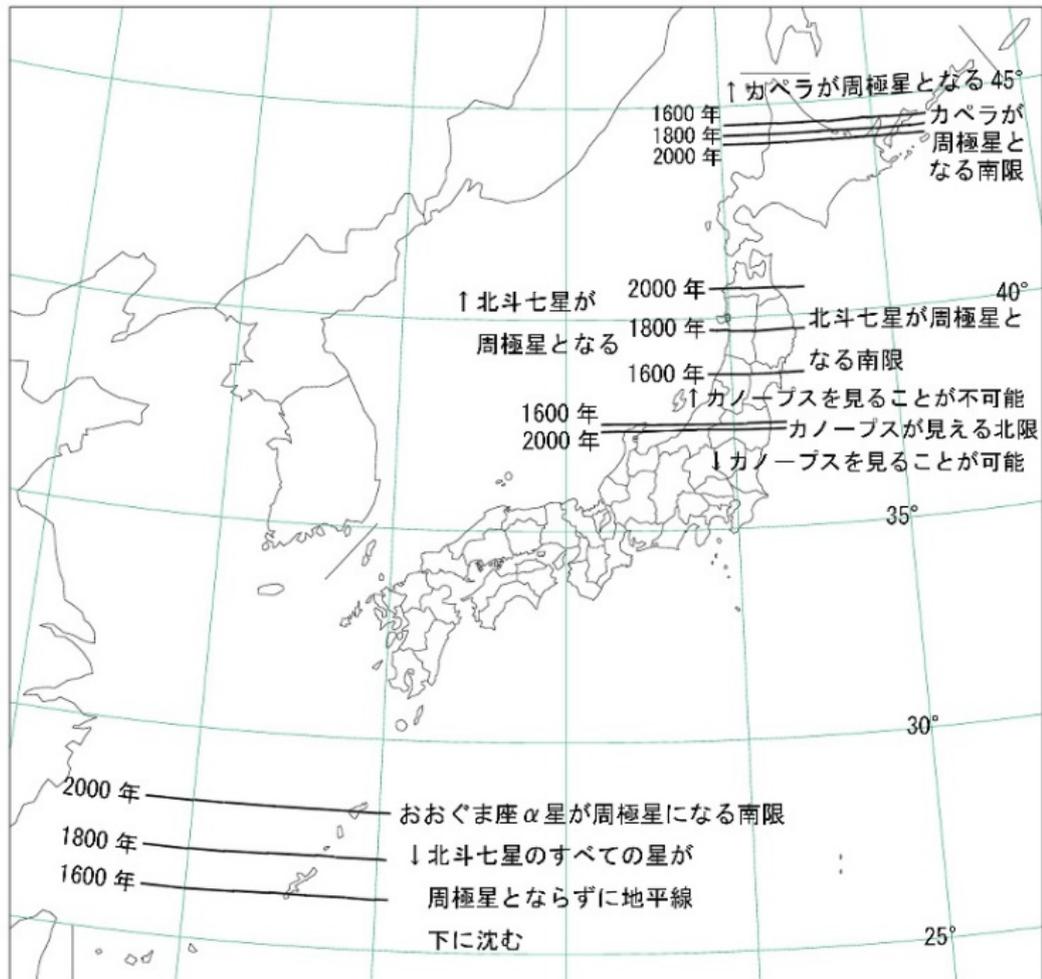


図 日本列島における星の認知の相違

IV 認知天文学からの展開—宇宙観・コスモロジーへの試論

多良間島のに一りに歌われている秋の四辺形と太陽(ティダ)の認知をもとに宇宙観・コスモロジーへの試論を進めたい。

1 秋の四辺形

(1) 多良間のに一りに歌われている秋の四辺形のコスモロジー

星の出の冒頭に秋の四辺形が歌われている。秋の四辺形の星名は、次のように文献によって異なる。

- ・ユシヤスマヤ(稲村 1957)
- ・ユシヤスマヤー(稲村 1962)(外間他 1978)

そして、次のように文献ごとの多様性がある。

	秋の四辺形の星名	原典	意識
宮古島庶民史	ユシヤスマヤ	49 良ぬ方ゆ見いりば あがるなうみーりば 50 ゆしやすみややきんたて うりがあとからや	49 東の空を仰げば 50 ペガス星座(ママ)を望み、 (ゆしやすは島後で屋敷の事ペ がす星座の四つ星を指す)
宮古島旧記並史歌集解	ユシヤスマヤー	47 寅(とら)の方(ば)ゆ見いりば あがるなゆ、見いりば、 48 ゆしやすみやーや、 きんたてい、うりが あとからや、	47 寅の方則ち東を見ているとの 意、 48「ゆしやすみや」はペガス星座 (ママ)のこと、「ゆしやす」は島語 で屋敷のこと、ペガス星座の四つ 星を指す、「きんたて」は四隅の 柱を立てゝ家建をすること、即ち ペガス星座の四ツ星を見て、その 後からはの意
南島歌謡大成Ⅲ宮古篇	ユシヤスマヤー	47 寅(とら)の方(ば)ゆ見いり ば あがるなゆ 見いりば 48 ゆしやすみやーや きんたて い うりがあとからや	47 寅(とら)の方角<東方>を見 ると 東の方角を見ると 48 四隅<ペガス星座(ママ)>は 四隅に柱を立て その後からは

表2 秋の四辺形の出—文献による相違

なお、以下、『宮古島庶民史』を『庶民史』、『宮古島旧記並史歌集解』を『史歌集解』、『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』を『歌謡大成』と略して記す。

秋の四辺形の出の方角は、庶民史は良、他は寅となっている。しかし、庶民史の再版には、良に(とら)とふりがなある。(稲村 1972) したがって、庶民史の良は「うしとら」即ち北東ではなく、寅(東より 30 度北)を意味すると考えて間違いないだろう。

秋の四辺形を構成する星のなかでアンドロメダ座 α はほぼ寅の方向からのぼる。ただし、アンドロメダ座 α 星は 2 等星であり、ある程度高度が上がらないと認識できない。高度約 4 度、1900 年宮古島の場合、ほぼ寅の方角となる。秋の四辺形の星が全てのぼったとき四辺形の中心は東から北へ約 20 度である。寅よりも南である。従って、意識として、庶民史では「東の空」としている。また、史歌集解では「寅の方則ち東」、歌謡大成では「寅(とら)の方角<東方>」としている。歌謡大成は歌は史歌集解に準拠しているが、解釈については外間守善氏、新里幸昭氏が記している。

次に、きんたてい(史歌集解)(歌謡大成)、きんたて(庶民史)が歌われている。史歌集解には、「きんたて」は四隅の柱を立て、家建をすることと明記されている。秋の四辺形は、家を建てるときの技術的な目標になっただけだろうか。私は、技術的な目標となっただけでなく、秋の四辺形が住居空間となり、世界観、宇宙観まで結びついていると考える。

宇宙観ないしコスモロジーを考えるにあたって、星空を含む空間を対象にして、ひとつひとつの事象を整理していかなければならない。元は人間は、洞窟のなかに住んでいたとする。そこからは星は見えない。しかし、自ら家を建てるという時代になったとき、星空であった天井の代わりに自分たちの家の天井が出来上がる。家を建てる時の柱は、天に向かって立つ。そう考えたとき、秋の四辺形の 4 個の星が柱に結び付くことは自然なことであり、それが生活空間でありコスモロジーであり宇宙観であると考えられる。

(2) 波照間島で唄われる秋の四辺形のコスモロジー

この多良間のに一りの冒頭の秋の四辺形と家を建てる柱に似たコスモロジーを波照間で見ることができる。波照間島の「ひーすくり・じらば」の「ユツァシキ」である。「ひーすくり・じらば」に歌われている「ユツァシキ」も秋の四辺形であり、家建てという共通点がみられる。

「ひーすくり・じらば

その一 ゆつあしキ・じらば

原歌 訳

ゆつあしキてそー 四辺形星を

やーなうーばし 元にして

やーばちくーり 家を造った

あんちよー そうな

ウリヤミョーナチャ 囃子(それは 冥加なことよ)」

(玉城 2000)

秋の四辺形は家建てと関係がある重要な星で、だからこそ最初に歌ったのであろう。

(3) アイヌの秋の四辺形のコスモロジー

秋の四辺形のマクワノハブを死後に行くあの世の入り口に見立てた。(末岡 2009)

末岡氏は、仏教説話の影響を受けたもので取るに足りないとして記しているが、独立して似た発想が形成されることもある。星空に死後の世界を描くのは、宇宙観として捉えることができると考える。

2 多良間島のに一りのティダ・太陽

太陽は、宇宙観・世界観のなかで多様な意味を持つ。多良間のに一りの「39 にいらてだみうかぎん あらう天太みうぶきん」と53節～55節の「53 うぶてだゆ上がらし」「54 にいらてだ、うかぎん、あらうてだみうぶきん」は、太陽を支配者と重ね合わせている。死者の国から青綱をたどり白川浜へ、星ぼしの出をひとつひとつ歌い、最後に支配者である太陽がのぼる。死者の国から生きかえることと、それぞれの星の出、そして支配者である太陽が最後にのぼること。天体が単なる景観としてではなく、生死を含めた宇宙観・世界観を構成している。

天太(てだ)には、死者の国の天太(てだ)と最後にのぼる天体としての「うぶてだ」がある。死者の国にも、そして現世にも、天太(てだ)がある。にいら天太について、庶民史は閻魔大王、史歌集解では後生大王、村誌では「にいら天太」という表記をそのまま使用、歌謡大成では「ニイラ太陽(てだ)加那志」と太陽を含めて表記している。(表3) 支配者を太陽(てだ)ということはこの歌の世界観の根幹であり、北尾もその点を留意して意識を試みた。

死者の国にも支配者が存在し、それが太陽であり、現世にも支配者が存在しそれが太陽であり、そして与那覇勢頭豊見親が支配者になるという3つの太陽。そして、蘇生して現世(白川浜)に戻る時間軸が秋の四辺形、プレアデス星団、アルデバランとヒアデス星団でつくるV字形、オリオン座三つ星、シリウスとプロキオンの出ではなかろうか。

ところが、表3のように、庶民史においては閻魔大王、史歌集解においては後生大王と意識されている。歌謡大成だけニイラ太陽(てだ)加那志と記している。

	原典	意識
庶民史	25 にいら天太かなすや あらう大帳(うぶちよう)ゆ 26 下(すた)うから起しば 終わりがみしゃばきば	25 そこで閻魔大王は後生の大帳簿を 26 終りまで詳しく御調べになり
史歌集解	25 にいら天太(てだ)かなすや、 あらう大帳ゆ、 26 下(すた)うから起しば 終りがみ、しゃばきば、	25 これを聞いて後生大王は、その後生の大きな帳簿を調べられたら 26 昔から現在までの事を取調べられたの意、しゃばきは捌(さば)く事、調べる事である。
歌謡大成	25 にいら天太(てだ)かなすや あらう大帳ゆ 26 下(すた)うから 起しば 終りがみ、しゃばきば	25 ニイラ太陽(てだ)加那志は アラウ大帳簿を 26 始めから起こして 終りまで調べられたが
北尾	25 にいら天太(てだ)かなすや あらう大帳ゆ、 26 下(すた)うから起しば 終りがみ、しゃばきば、	25 にいら島の支配者(てだ、太陽)は、あらう島の大きな帳簿を調べられたら 26 昔から現在まで、しゃばき(捌(さば)くこと、即ち調べること)すれば

表3 天太が大帳簿を調べる箇所の意識

死者の国、現世ともに、太陽と同義であり、北尾は、歌謡大成の意識に従って支配者(てだ、太陽)と表記した。

死者の国から天太により蘇生する箇所(表4)においても、庶民史は閻魔大王となっている。歌謡大成は太陽ということを明記している。支配者を太陽と同一視して、支配者(てだ、太陽)と意識した。

	原典	意識
庶民史	40 にいら天太みうかぎん あらう天太みうぶきん	40 閻魔大王の御慈悲により
史歌集解	39 にいらてだみうかぎん、 あらう天太みうぶきん、	39「みうかぎ」「みうぶき」は同意で御陰(おかげ)様で、又は御助けに依っての意「み」は接頭語である。
歌謡大成	39 にいらてだ みうかぎん あらう天太 みうぶきん	39 ニイラ太陽のお陰で アラウ太陽のお陰で
北尾	39 にいらてだみうかぎん あらう天太みうぶきん	39 にいら島の支配者(てだ、太陽)の御陰様で。あらう島の支配者(てだ、太陽)の御助けで

表4 死者の国から天太により蘇生する箇所の意識

ウブラクーラに続いて、明るくなり天体としての「うぶてだ」即ち太陽がのぼる。うぶてだについて、庶民史では太陽、史歌集解では「お日様」、歌謡大成では大太陽であった。「ていだ」で太陽なので親しみを込めて「うていだ」即ち「お日様」と解釈したのだろう。大太陽と解釈したのは、「うぶ」即ち「大」と明記したのだろう。

天体としての太陽の出にも支配者を意味する部分があり、北尾は、表5のように、「太陽が上がり、お日様が上がり、支配者が上がり」と意識した。

	原典	意識
庶民史	55 うぶ天太(てだ)ゆ上らし	55 その後に太陽が上るようになり
史歌集解	53 うぶてだゆ上らし	53 お日様が上ってきた
歌謡大成	53 うぶてだゆ 上らし	53 大太陽(てだ)をあがらし
北尾	53 うぶてだゆ上らし	53 太陽が上がり、お日様が上がり、支配者が上がり

表5 うぶてだの出—文献による相違

そして、星の出、太陽の出の結果、与那覇勢頭豊見親が支配者(てだ、太陽)になるというコスモロジーを意識に入れた。

ところで、このに一りはフィクションではない。1390年に与那覇勢頭豊見親が中山に朝貢した前のことであると思われる。戦いで瀕死の重傷を負って死者の国に下りていったが、蘇生して宮古島を治めることになった与那覇勢頭豊見親を歌う「に一り」の最後の部分のクライマックスに星が登場する。

那覇市のタカマサイ公園に与那覇勢頭豊見親逗留旧跡碑がある。与那覇勢頭豊見親の屋敷跡である。与那覇勢頭豊見親は、歴史上の人物であるが、詳細は不明である。下地和宏氏は、「与那覇勢頭豊見親は洪武 23 年(1390)中山に初めて朝貢したことでつとに知られる歴史上の人物である。にもかかわらず霧の中の人物のままである」と記している。与那覇勢頭は、宮古島主に任命されるが、具体的にどのように統治したかは不明である。(下地 2008)

なお、瀕死の重傷を負った戦いとは、稲村賢敷氏は目黒盛戦争のことと記している。(稲村 1962)

最後に、星の出、太陽の出を歌ったあとに、その結果どうなったかを歌っている。

庶民史の意識が他の文献の意識と大きく異なって、「沖縄島を見つける事が出来たこの航路を後世

の者共よ、よくならつて怠るな」と記されている。順に東の空に見える星を目当てに航海せよという解釈については疑問である。というのは、日の入り後に秋の四辺形がのぼり、明け方にシリウスとプロキオン（ウブラクーラ）がのぼるとするのは、8月の限定された時期のみである。航海は年中行なわれ、秋の四辺形からシリウスとプロキオンの出が見える季節のみではない。航海の目標はニヌファブス（北極星）であり、にりで歌われている星は世界観、宇宙観の時間軸、空間軸を表現していると考えられる。

	原典	意識
庶民史	57 島たていばならいゆ ふんたていばらいう	57 沖縄島を見つける事が出来たこの航路を後世の者共よ、よくなつて怠るな
史歌集解	54 にいらてだ、うかぎん、 あらうてだみうぶきん、 55 島たていばならいゆ ふん立ていばならいゆ、	54 にいら大王の御陰様での意 55「島たてい、ふん立」は宮古島を立派に立て直した、後世の人々はこれを見習えの意である。
歌謡大成	54 にいらてだ うかぎん あらうてだ みうぶきん 55 島たていば ならいゆ ふん立ていば ならいゆ	54 ニイラ太陽のお蔭で アラウ太陽のお蔭で 55 島立てを習った 国立てを習った
北尾	54 にいらてだ、うかぎん、 あらうてだみうぶきん、 55 島たていばならいゆ ふん立ていばならいゆ、	54 にいら島の支配者(てだ、太陽)の御陰様で あらう島の支配者(てだ、太陽)の御助けで 55 宮古島の支配者(てだ、太陽)になって宮古島を立派に立て直した(島たてい、ふん立)ことを(後世の人は)見習え

表6 星の出、太陽の出の結果

3 犬飼星

インソーヤブシ(犬伴星)という星名が沖縄県うるま市浜比嘉島浜に伝えられている。インは「犬」、ソーヤは「連れていく」という意味で、わし座アルタイルと β γ を意味する。

インソーヤブシ(わし座 β 、アルタイル、 γ)の延長線上にウフブシ(ベガ)があり、この間に天の河が横たわっているので、これらの関係を浜比嘉島浜では、犬をひきつれたサトゥヌシ(士族の位階)がチュラアングワー(美女星、ベガ)に会いに行こうとしているところと見立てた。 β 、 γ は犬だが、 γ の犬のほうが度胸があって主人(アルタイル)よりも先に大河(天の河)に入ったと言われている。漁師、二人より聞いた星名である。(金城誠 1984)

九州に伝えられている犬飼星が沖縄にインソーヤブシとして伝えられている。犬飼星は、平安時代中期の辞書である源順著『倭名類聚抄 天部第一』に、「牽牛 和名比古保之又以奴加比保之」と記されている古い星名である。(比古保之:ひこぼし、以奴加比保之:いぬかいぼし) もととは、京都で言われていた犬飼星は、現在は九州でしか記録できない。かつては、京都で語られた星名が九州に残り、インソーヤブシが沖縄で伝えられている。

また、犬ではなく、牛と馬に見立てた事例が宮古島に伝えられている。織女、牽牛が大陸から入る前の宇宙観、コスモロジーに結び付く可能性があるかどうか、今後の課題としたい。

◆ウシウマピキブス、ウシムマピキブス (わし座アルタイルと β γ) …宮古郡上野村字宮國 (現 宮古島市上野字宮国)

わし座アルタイルとβγ：★

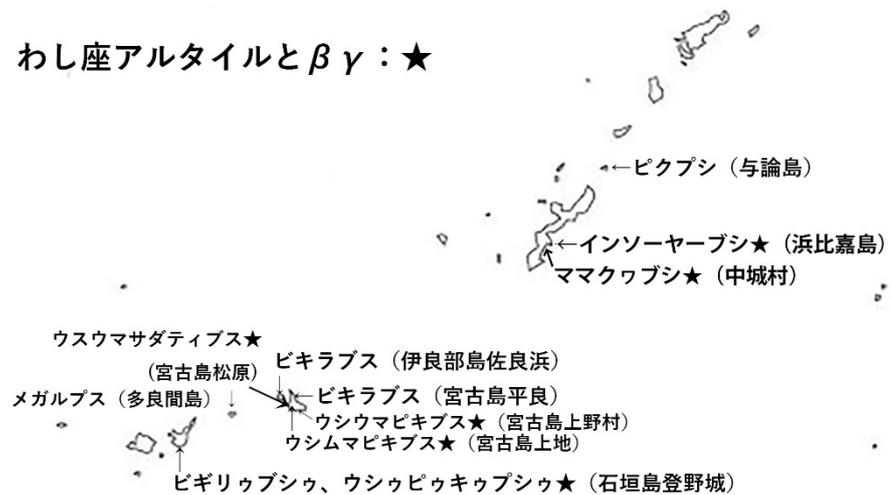


図 わし座アルタイルとβγの星名

4 スバル、群れ星に追いやられた星

トカラ列島以北はスマル、スバルのグループの星名が分布する。奄美大島、喜界島以南はスマル、スバルのグループの星名は記録できていない。奄美大島、喜界島以南は、群れ星のグループの星名が広く分布している。群れ星以外のグループの星名は、奄美大島のナナツブシ、加計呂麻島のナナツレブシ、石垣島のフナーブシィ、クナーブシィ、ユブス等、一部だけである。喜舎場永珣氏は、石垣島の大川のフナーブシィについて、「語源は組星(クナーブシィ)の転である。組合っている星の集団の意」と記している。(喜舎場 1970a)

また、群れ星のグループの星名がプレアデス星団ではなく、「空全体の星」「プレアデス星団以外の一か所にまとまった星列」を意味する伝承事例を記録した。

群れ星が図のように、沖縄本島全域に分布するのであるが、奄美大島のナナツブシ、加計呂麻島のナナツレブシ、石垣島のフナーブシィ、クナーブシィ、ユブス等は、群れ星が伝播する前から存在していた星名ではなかろうか。

特にナナツブシは、大分にも広く分布し、かつてスバルが広がる前は広く使われていたのではないだろうか。

奄美・喜界島以南にはスマル・スバルのグループの星名は分布しない。しかし、宮古島にスマルという言葉は現在においても使われている。星名としてではなく、束ねる意に使われている。

『宮古島旧記並史歌集解』に掲載されている「金志川金盛があやご」に「ゆばらかぎ、すまりよ」とある。稲村氏は、「『すまり』又『すまる』は日本の古語である。くゝる事、たばねる事、八尺瓊(やさかに)曲玉の事を五百箇御統の玉(いをつみすまるの玉)とも言、これは五百箇の多くの玉を一本の糸に貫いてある玉の意である」「この『みすまる』は此の宮古島語の『すまる』と同義で種々多様の物を一つに束ねる意である」「『すまる』は現在でも束ねる意に使用されている」と記している。(稲村 1962) 現在も宮古島では「すまる」を束ねる意に使われているとあるが、星名は「すまる」でなく、ンミブス(群れ星)であった。宮古島の「すまる」

という言葉が星を意味しないでシミブスということは、「すまる」が星を意味するようになったのは日琉祖語の分岐以降と考えてよいかどうか。これも今後の課題としたい。

拙著『日本の星名事典』では古事記に登場する古代の玉飾り「美須麻流之珠(みすまるのたま)」を星のスマルとすることに対する疑問を悩みながら書いた(北尾 2018)。宮古島で星の名前として「すまる」にならなかったことからすると、古事記の時代の「みすまる」は星を意味していたと安易に断定してはいけないことになる。

これからも、沖縄・奄美の星名を調査研究を通して、日本列島全体の星について考えていきたい。



南西諸島のプレアデス星団の星名

5 今後の課題

人びとの宇宙観、コスモロジーという視点から、次のようなテーマに取り組んでいきたい。

◆アガリミチブシへの祈り

アガリミチブシ(オリオン座三つ星)が見えないときに、祈りが行なわれていることの意味。また、ハーレーの前の儀式として行なわれている意味。

◆シヌグ

シヌグに星が歌われている意味。

◆綱引き

綱引き唄に星が歌われている意味。

引用文献

稲村 1957…稲村賢敷『宮古島庶民史』1957、pp.211-231。

稲村 1962…稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書、1962、pp.393-401。pp.431-432。

更科 1963…更科源藏『アイヌ民話集』北書房、1963、pp.184-185。

喜舎場 1970a…喜舎場永珣『八重山古謡 上巻』沖縄タイムス社、1970、p.51。

稲村 1972…稲村賢敷『宮古島庶民史』三一書房、1972、p.199。

北尾 1976…北尾浩一「アイヌの天文学」『STARS & GALAXIES o.6 1976』大阪天文学研究会、pp.1-5。

伊良部村史編纂委員会 1978…伊良部村史編纂委員会『伊良部村史』伊良部村役場、1978、p.1481。

外間他 1978…外間守善、新里幸昭『南島歌謡大成Ⅲ宮古島』角川書店、1978、pp.163-165。

金城誠 1984…金城誠「浜・比嘉で拾った星の方言名」『やちむん第8号』やちむん会、1984、pp.62-69。

金城誠 1986…金城誠「星の方言名-糸満市字糸満-」『やちむん第9号』やちむん会、1986、pp.47-53。

平良市史編さん委員会 1987…平良市史編さん委員会『平良市史第七巻資料編5 民俗・歌謡』平良市教育委員会、1987、p.620。

ネフスキー 1998…ニコライ・A・ネフスキー『宮古のフォークロア』砂子屋書房、1998、pp.190-191。pp.272-273。

玉城 2000…玉城功一「ひーすくり・じらば」竹富町古謡編集委員会『竹富町古謡集 第三集』竹富町教育委員会、2000、p.306。

城辺町史編纂委員会 2000…城辺町史編纂委員会『城辺町史 第6巻歌謡編』2000、p.166。

萱野 2002…萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典 増補版』三省堂、2002、p.220。

ネフスキー 2005a…ニコライ・A・ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート上』、平良市教育委員会、2005、p.113、p.125、p.184、p.314、p.568、p.617。

ネフスキー2005b…ニコライ・A・ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート下』、平良市教育委員会、2005、p.93、p.115、p.135、p.376、p.430、p.481。

下地 2008…下地和宏「与那覇勢頭豊見親について」『宮古島市総合博物館紀要第12号』2008、pp.11-26。

末岡 2009…末岡外美夫『人間達(アイヌタリ)のみた星座と伝承』2009、pp.444-451。pp.580-581。

大里字誌編集委員会 2009…大里字誌編集委員会『大里字誌』糸満市大里公民館、pp.681-687。

Patick Beillevai2010…Patick Beillevaire, OKINAWA1930 NOTES EHENOGRAPHIQUES DE CHARLES HAGUENAUER,p.69。

金城善 2014…金城善「フランス人東洋学者シャルル・アグノエルが訪ねた昭和五年の糸満町」『沖縄民俗研究第33号』沖縄民俗学会、2014、pp.25-49。

北尾 2018…北尾浩一『日本の星名事典』原書房、2018、pp.17-18。p.92。

渡久山他 2020…渡久山春英、セリック・ケナン『南琉球宮古語多良間方言辞典』国立国語研究所、2020、p.36。p.250。

北尾 2021…北尾浩一「天文民俗学試論 184」『天界 2021年3月』東亜天文学会、2021、pp.81-83。

北尾 2023a…北尾浩一「天文民俗学試論 189」『天界 2023年8月』東亜天文学会、2023、pp.291-292。

北尾 2023b…北尾浩一「天文民俗学試論 190」『天界 2023年9月』東亜天文学会、2023、pp.329-330。

北尾 2023c…北尾浩一「天文民俗学試論 191」『天界 2023年11月』東亜天文学会、2023、pp.407-408。

北尾 C…北尾による現地調査

北尾 AC…北尾によるアンケート調査